

# 「七日市場の歴史(第五十三回)」

## 市場があった頃のこと ①

曾根原 孝和

**村や市場の成立** 七日市場村は、寛文三年(一六六三)、二本村から一日市場村と一緒に分村して、四十戸で発足しました。名前は以前に「市場」があったことから付けられたといわれています。市場は、村の成立よりずっと以前の鎌倉時代のことですが、研究などから様子が分かりつつあります。

**北東部にあった市場** 市場の位置は七日市場の北東部で、原っぱが広がっていて、市場は毎月七のつく日に開かれた「三斎市」でした。様子を伝える資料はありませんが、当時を左の推測図や他の市場の様子などから少し考えてみます。

**地字から** 北東に「社宮神」の地名が多く、一角に開拓の神を祀った「社宮司」の社があります。社宮司は「大同年間(八〇六〜一〇)に勧請、慶長年間に再興」とされ、かつての市神とも考えられています。

松本道の南側には、油田・籠田・カチ田(鍛冶)など交易や職人などの存在を示す地字があります。また、伽藍田・行人田・経塚田など仏事関係の地字もみられ、念仏僧、旅する行者らの修行や説法の場ともなり、にぎやかな市場のようすが浮かび上がるといわれています。

**交通の便** 道は南北に仁科道、千国道、飛驒道が通り、東西には松本道、長尾松本道が通じ、梓川を長尾前で渡り府中(松本)に抜けています。長尾前は安曇野ばかりでなく、広く松本平らの交通の要衝でした。



市場が推定される七日市場の北東部  
(地字・道・堰など『三郷村誌』から)

※10月には公民館の「史跡巡り」が北東部で予定されています。